

難波渦

2007.6
No.6

題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

文化遺産視察「韓国・慶州の文化遺産」

2006年12月5日（火）～12月7日（木）
韓国・釜山～金海～慶州

2007年に開催する国際シンポジウムの準備のため、2006年12月5日（火）～7日（木）の日程で、韓国・慶州の文化遺産の現状視察に行きました。景観や遺物を含めた文化遺産をいかにして保存・継承していくかということに主眼を置いた今回の視察は、大阪の文化遺産を調査・研究する上でも多くの共通点を見出すことができました。

当日は関西国際空港を出発し、金海国際空港へ向かいました。所要時間はおよそ1時間半。大阪からなら、沖縄へ行くよりも短い時間で着きます。金海市はかつて駕洛国があったところで、盧武鉉大統領の出身地でもあるそうです。ここからはバスでの移動となり、通度寺に向かいました。

通度寺は韓国三大寺院と呼ばれる寺院のひとつで、慈蔵律師が釈迦如来真身舍利を奉り、646年に創建したとされています。真身舍利が安置されているため、通度寺の大雄殿には仏像が安置されていません。山門の装飾を見ても、日本の寺院とはまったく違った雰囲気を持っています。

次に訪れたのが大陵苑です。「屋根のない博物館」とか「古墳の中に街がある」と形容される慶州の中でも、最も多くの古墳が密集しているところです。市内にはおよそ200基の古墳があるといわれていますが、そのほとんどが未発掘だそうです。その中に皇南洞古墳群があり、一部が古墳公園として整備されています。それが大陵苑です。この大陵苑には日本でもよく名の知られている「天馬塚」「皇南大塚」などを含め23基の古墳があります。復元・公開されている「天馬塚」の中に入ると、新羅時代の大型古墳内の様子を知ることができます。天馬塚は東西60m、南北51m、高さ12.7mの円墳で、木槨を主体部にもつ積石塚で、さらにその上を粘土で被い墳丘が形成されたものです。1973年に発掘調査が行われ、木槨内から金冠・金冠帽などの装身具、金銅鞍・白樺樹皮製の障泥など各種の馬具、金銅・銀・青銅製の



通度寺山門

容器、瑠璃容器、各種鉄器や土器類など1万点以上にもおよぶ遺物が出土しました。出土品のうちの白樺樹皮製の障泥に描かれた天馬図から天馬塚と呼ばれるようになったそうです。現地には一部の遺物や複製品が展示され、木槨と副葬品の出土状況が復元され公開されています。もうひとつの皇南大塚は直径80mの2基の円墳を連ねた、全長120mの瓢形の双円墳です。1973年から1975年に発掘調査が行われました。南墳で検出された主体部から男性の骨が出土し、続いて調査された北墳の主体部から「夫婦帯」との銘文をもった銀製帯金具が出土したことにより北側には女性が、南側には男性が埋葬されていたということが判りました。そして、天馬塚同様、金冠や金製帯などの装身具や、鉄製武器・武具類など約4万点にもおよぶ遺物が出土しました。現在、これらの遺物は国立慶州博物館に納められています。

初日最後に訪れたのが国立慶州博物館です。ここでは金誠龜館長（現国立中央博物館学芸室長）を表敬訪問したのち、時間の許す限り展示を見て回りました。雁鴨池館が閉まっていたのは残念でしたが、考古遺物や美術品など、数多くの貴重な資料を見ることができました。中でも、金製の装飾品が印象に残っています。数もさるこ

とながらデザインも多様で、当時の人びとの金に対するこだわりのようなものを感じさせられました。もうひとつ印象に残っているのは、沖縄の御殿型蔵骨器に非常によく似た蔵骨器です。琉球王国時代の沖縄は、中国・日本との関係の中で考えられることが多いのですが、その固定観念はいずれ捨て去らなくてはならなくなるかもしれません。

この日は「瑤石宮」というお店で、夕食をいただきました。ここはかつての慶州の名家、崔家の邸を利用しており、建物自体が歴史的建造物としての価値を持っています。料理は煮物や焼き物、鍋物などが次々と出され、食べきれないほどでした。それもそのはず、その食べ残りが、かつては下男・下女たちの食事になっていたというのです。もったいないような気はするのですが、「もう十分です」という意思表示のためにもむしろ、食べきれないのがマナーなのかも知れません。

二日目は石窟庵の見学から始まりました。石窟庵は新羅時代の751年ごろ、宰相の金大城が前世の父母のために建立したとされる仏教寺院で、後述する仏国寺とともに、ユネスコ世界遺産に登録されています（文化遺産・1995年）。石窟と名づけられてはいますが、天然のものではなく、花崗岩を積み重ねた上に土盛されたものです。前室・扉道・主室からなる石窟の最奥部、ドーム状に天井が組まれた主室には釈迦如来坐像が安置されており、前室では参拝者が五体投地で祈りをささげていました。

国立慶州文化財研究所で展示を観覧させていただいた後、仏国寺に向かいました。仏国寺は石窟庵と同じく、751年に金大城によって建立された仏教寺院です。全盛期には60棟もの木造建築物がありましたが、そのほとんどが文禄の役（壬申倭乱、1593年）で消失してしまっているとされています。しかしながら、青雲橋や白雲橋などの石造物は当時の遺構と考えられており、同寺では多宝塔や金銅毘盧遮那仏などとともに、国宝に指定されています。

次は掛陵に行きました。この掛陵には新羅第38代元聖王（785年～798年）が埋葬されていると推定されています。伝えるところによると、水葬した棺を岩の上に掛けてその上に土をかぶせて造ったことから「掛陵」と呼ばれるようになったそうです。敷地に入ると武官・文官と思われる石造と、石製の獅子像があります。獅子像は日本の狛犬にとってもよく似ているように思いました。また、武官は縮れた髪に顔の彫が深く、顎鬚を持つなど西域の人物を表現したもので、時代に西域との交流があったことを教えてくれます。墳丘は周囲を十二支の神像をレリーフにした石板がはめられ、その外側を石柱と欄干に囲まれています。これが新羅時代の古墳の最終形態だといわれています。

四天王寺跡では発掘現場を見ることができました。『三国史記』に文武王の19年（679年）に完成したと記される四天王寺は、文武王の9年（669年）に唐の攻撃を防ぐため、四天王に祈請して靈験を感得し建てられた護国の寺であると『三国遺事』に伝えられている寺院です。また、統一新羅以後に一金堂一塔式だったものが一金堂二塔式に変化したそうです。1943年、1968年に発掘調査が行われ、塔や金堂の礎石が検出されました。塔址から緑釉で四天王像埴が出土し、その造型は見事なもので、当時の彫刻技術の高さがうかがえます。これは国立慶州博物館で展示されています。さらに近くには亀の形をした石碑の土台である亀趺が2基あります。なぜか首が落とされています。この亀趺は慶州では昌林寺のものや武烈王陵のものや並んで三指に入るといわれています。我々が見学させていただいたときは、ちょうど2006年度の調査期間にあたり、レンガ造りの基壇をもつ木塔であったことが確認された西塔址の遺構をみせていただくことができました。これは韓国古代仏塔で初めて確認されたもので、大変貴重なものを見ることができました。また、今回の調査で出土した瓦などの遺物の量がとてつもなく多く、それが綺麗に積み上げられていたのには感動しました。日本ではまずお目にかかること



食の文化遺産 韓定食



石窟庵にて瓦を奉納する高橋センター長

ができない手法でした。そして、金鍋詳氏や現場の調査員の方がたのご好意により、写真撮影用のクレーンに乗せていただきました。日本の現場では全景写真を撮るときには工事現場で使用するような足場を2段、3段と立ててそこから写真を撮るのですが、韓国ではクレーンを使っているようです。高所恐怖症だったのですが、普通写真でしかみることができない遺構全体像をみることができ、震える手で何枚も写真を撮ってしまいました。

また東国大学が発掘調査している現場を見学する機会を得ました。我々が訪れた日にちょうど、遺跡の文化財発掘調査指導委員会が開催されていました。まだ正式に報告されていないので詳しい事はいえませんが、炬をもった住居址や溝などの遺構が検出され、石器や土器が出土したようです。調査とは直接関係ありませんが、遺跡の周辺には支石墓が点在していました。現場で東国大学の学生さんが検出された遺構について懇切丁寧に説明してくださいました。さらに調査事務所に場所を移し、調査の概要を報告していただきました。韓国も日本も同じ手続きを踏んで発掘調査が行われており、日本でみる現場と同じでした。韓国でこのような発掘調査現場をみることができ、文化財に対する熱い思いが伝わり、国境を越えて文化財を考えていかなければならないと感じました。お忙しい中お邪魔したにもかかわらず、丁寧な対

応をしてくださいました発掘調査隊のかたがたには、この場を借りて心からお礼申し上げます。

最後は、財団法人慶州文化遺産調査団の金鍋詳氏に、「新羅（慶州）文化の現在」というテーマで特別講演をしていただきました。1980年代から90年代にかけては、韓国考古学の発展期となった時期ですが、発掘が大学の博物館中心に短期間で行なわれたために、報告書が出ないとか、学生に対する教育が十分にできないといった問題が起こっていたそうです。現在は財団法人が中心となって発掘を行っていて、お寺など、古墳以外の発掘が行なわれるようになったそうですが、同じような問題が起きないかが心配されています。麻釜を使った麻繊維作りの話もとても興味深く聞かせていただきました。労働に対して得る収入が少なく、10年後には麻を作る人がいなくなるだろうとのことでした。日本でも生産現場では後継者不足に悩んでいるところが多く、文化遺産をいかに継承していくかという問題は共通しているといえるでしょう。

最終日は日本に帰るだけになってしまいました。実質1日半の日程ですべてを回ったので、かなりの強行軍となってしまったのが残念でしたが、とても有意義な視察になりました。7月14日(土)の国際シンポジウム「人々の暮らしと文化遺産—中国・韓国・日本の対話—」では議論が深まることを期待してやみません。

(生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 宮元 正博
R.A. 千葉 太郎)



仏国寺山門



掛後にて金鍋詳氏と一緒に記念撮影



四天王寺跡の発掘現場にて
クレーンに乗せてもらう R.A. 千葉

第4回 NOCHS レクチャーシリーズ 「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」

2007年1月19日（金）

会場：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心

2007年1月19日に、第4回NOCHSレクチャーシリーズ「中・近世大坂の寺院と歴史資料遺産」が開催されました。

中・近世の大坂には、四天王寺をはじめ、豊臣秀吉の大坂築城以前に浄土真宗の本拠地であった大坂本願寺など多くの寺院があったことが知られています。最近では、寺院史の研究が盛んで、今回のレクチャーシリーズには、真宗史や地域史の観点で寺院史研究に取り組んでおられる大阪歴史博物館の大澤研一氏をお招きしました。

また、文化庁調査官として歴史資料の指定に関わっておられた東京国立博物館の富坂賢氏をお招きして、当センターが研究プロジェクトのひとつとして取り上げている「歴史資料遺産」についてご講演いただきました。

富坂氏は関大OBで、大澤氏ともかつて一緒にお仕事をされたことがあるとのことを当日披露され、アットホームな雰囲気の中、これまでとはちがった視点で、大坂の寺院や文化財について考える機会となりました。なお、当日は39名の方がたが聴講されました。

地域のなかで寺院を考える

—中世～近世の摂河泉を題材に—
大阪歴史博物館 大澤研一

大澤氏は、寺院の宗教的所有物＝史料ではないとの前提にたち、寺院の多彩な“史料”から何が読み解けるのかについてはこれまであまり考えられていないことを指摘され、寺院史料論の必要性を訴えられました。

和泉市の松尾寺の事例からは、中世の寺院についてはこれまで、いわゆる鎌倉新仏教に焦点が当てられてきたものの、松尾寺のように真言宗や天台宗を修学する顕密寺院についても見直さなければならないとされました。松尾寺は山内に100以上の子院があり、「松尾大工」といわれる職人集団を抱え、都市としての側面があることも注目されます。同じような例は、四天王寺にもみられ、天王寺舞楽が箕面の勝尾寺の法会でも行われていたり、桧皮大工が勝尾寺の本堂などの屋根の吹き上げに参加したり、尾道の西国寺三重塔の修造に瓦大工が出張したりしています。つまり、寺院は、多くのネットワークをもち、地域における経済・文化活動の結節点としての役割を果たしていたことがわかるのです。

また、これまで農村部宗教のイメージが強かった浄土真宗について、最近の寺内町研究の成果から、現在で

は交通や商業、都市との関わりが注目され、都市史研究の観点から空間構造論が盛んであることが紹介されました。戦国時代以降、城下町が形成されるようになりますが、その母体として寺内町があったことを指摘され、これからは社会的な視野から寺内町を考察することが必要であるとされました。また、浄土真宗と同様、念仏信仰のひとつである融通念仏について取り上げられました。大阪市平野区には融通念仏宗の本山である大念仏寺がありますが、信仰圏がほぼ大阪と奈良に限られ、中・近世大坂の寺院を考える上では見逃せない信仰です。融通念仏とは、お互いに唱え合う念仏が融通しあってご利益が倍増するという集団性の高い信仰で、虫払いや祈雨などの民間信仰的な側面をもって人びとに浸透していったとされました。しかし、家意識の高まりとともに教団のありかたが変化したようです。

融通念仏宗のように、中近世移行期から近世にかけて寺院と社会との関係は大きく変化していきますが、いかにこの時期の寺院を社会につなげて考えるかという問題もこれからの課題であるとされました。特に、大坂の場合は、天正11年（1583）の大坂城下町の建設に連動して新設された寺町寺院の研究が少ないことにふられ、都市のなかの寺院の存在形態を考察すべきであると指摘されました。四天王寺は当初城下町に取り込まれていたものの、のちに外れたり、浄土真宗の寺院は寺町以外にも認められ、それゆえ城下町の人びととのつながりが密であったことなどが事例として挙げられました。

そして最後に、これからの寺院史研究の方向として、特定の時代にとらわれない寺院の系譜や、地域史を考える上でのひとつの切り口として寺院に注目することが重要であるとされ、寺院を核とした地域史研究へと発展させていかなければならないことを強調されました。

大澤氏の報告は、内容が多岐にわたっていましたが、多くの具体的な事例を挙げられ、現在の寺院史研究の問題点と今後の課題を明確に示され、これからこうしたテーマに取り組もうとしている大学院生などには貴重な時間になったと思います。大澤氏の温厚なお人柄ともあいまって、寺院史研究のおもしろさを感じることができました。
(P.D. 櫻木 潤)



大澤研一氏（左）と富坂賢氏（右）

国指定文化財・歴史資料の現状と課題

独立行政法人国立博物館東京国立博物館
富坂 賢

富坂氏には、Ⅰ文化財としての「歴史資料」、Ⅱ国指定文化財にみる「歴史資料」の特徴、Ⅲ「歴史資料」の課題—とくに保存・修理について—、の三点から「歴史資料」について報告していただきました。

Ⅰ文化財としての「歴史資料」では、文化庁のこれまでの取り組みに関連して、具体的には昭和25年の文化財保護法制定から平成17年の一部改正までの法体系の整備について、ご説明していただきました。そのなかで、昭和50年の文化財保護法第2条第1項の一部改正によって、学術的に価値の高いものを網羅的に、かつ絵画、書籍、古文書、彫刻などの分野と横断的に関わる「歴史資料」を専ら扱う「歴史資料部門」が設置されたことが解説されました。

続いて、「歴史資料」概念の拡がりについてのお話に移りました。その主な要因は、①科学技術関係、②近代の文化遺産、③登録制度の登場、についてです。

①科学技術関係については、国宝や重要文化財を指定しようとするときの基本的な考え方を示す「国宝及び重要文化財指定基準」の重要文化財の指定項目規定が、平成8年に一部改正されたことと関係しています。すなわち、これまで重要文化財の主な対象は「政治、経済、社会、文化」分野で学術的価値が特に高いものでしたが、そこに新たに「科学技術」が加わったことです。

②近代の文化遺産については、近年特に失われつつある明治・大正・昭和期の「歴史資料」の保護及び国指定を行うべく、平成8年に「近代の文化遺産の保存と活用に関する調査研究協力者会議」報告が取りまとめられたことと深く関わっています。ちなみに、現在指定されている文化財の中で一番新しい資料を含む物件は、平成14年に指定された京都府行政文書、平成17年の山口県の行政文書であり、昭和22年までの資料を対象としているとのこと（報告時：平成18年度現在）。これは国指定文化財が近代の「歴史資料」に目を向け始めた証拠でもあります。

③登録制度の登場は、②の近代の文化遺産とも関わりますが、例えば新しい時代の資料など、国指定の文化財として十分な議論や研究が深められる以前に、学術的価値の高い資料が失われてしまわないようにいったん登録しておくもので、平成17年から始められた制度です。このように、概念が拡がりつつある国指定文化財の「歴史資料」を整理すると次のようになります。1つは、きわめて広範な分野を網羅していること。2つに、伝統的な文化財、絵画、彫刻、工芸、書籍、典籍、古文書を横

断的に含んでいること。3つに、素材や形態が多様、特殊であること。4つに、多量の一括資料を含んでいること、が挙げられます。以上が、文化財としての「歴史資料」についてです。

Ⅱ国指定文化財にみる「歴史資料」の特徴では、具体的な国指定文化財を取り上げてご説明されました。報告では、「歴史資料」の特徴として、i資料の素材や形態の特殊性について、iiさらにそれらが組み合わせるという複合性について、iii大量の資料の3点が指摘されました。

i特殊性については、「慶長遣欧使節関係資料」の中に含まれる「ローマ市公民権証書」（素材は羊皮紙）や「島津斉彬銀板写真」を事例にして説明されました。後者の銀板写真は、現在のフィルムとは異なり、1枚だけしか現存しないという希少性の高いものであることが述べられました。形態の特殊性については、渾天儀とエレキテルを取り上げて解説されました。エレキテルの場合、いわゆる工芸品としてのみ見るのではなく、その中にある機械の仕組みまでも含めて、重要文化財指定の対象と捉えられている点が、興味深く感じました。

ii複合性については、京都府行政文書を事例に紹介されました。京都府行政文書は、総点数1万2641点、年代は慶応3年から昭和22年までを含んでいる資料群です。そのため、一括にされる資料群でも、それぞれに応じた保存管理や修理の方法がある点が強調されました。

iii大量の資料では、京都円光寺の伏見版木活字を事例に説明されました。その活字一個一個の点数は、5万2320個に及ぶ大量の資料です。この他に、上野寛永寺所蔵の寛永寺版の活字25万個の資料もあるそうです。

最後に、Ⅲ「歴史資料」の課題について、特に保存と修理に焦点をあててご報告されました。まず技術的な課題に関して、伝統的な美術工芸品の修理を行っている京都国立博物館を例に述べられました。続いて、近代の歴史資料の保存・修復については、横浜市所蔵のスチームハンマー（1865年オランダ製）を事例に、修理事業の様子が述べられました。様々な素材や幅広い年代に関わる「歴史資料」の保存・修復に関する方法と理念は、いまだ確立されておらず、今後の課題であると説明され、報告は終了しました。

富坂氏の報告では、色鮮やかなカラー写真を多く用いたレジュメや、スライドでこれまで指定された「歴史資料」について紹介され、普段あまり馴染みのない文化庁の取り組みをわかりやすく解説していただきました。また、指定番号や名称、指定年月日などの入った「歴史資料指定文化財一覧」も貴重な資料として今後活用させていただきたいと思います。

（歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永 友和）

研究室だより

2006 年度第 2 回学芸遺産研究例会

山本 卓 (関西大学文学部教授)

「上方浮世草子作者「都の錦」

—メディアとしての舌耕・書き本、そして出版—

鶴崎裕雄 (帝塚山学院大学名誉教授)

「港の歴史と文化 —江口・神崎・大物—」

2006 年 12 月 4 日 (月)

山本報告では、上方の浮世草子作者である都の錦について、年譜だけではわからない人物像を著作から探りました。都の錦の著作の中には、太平記や徒然草を講釈する様子を描いて舌耕を想起させたり、「回国堂三千風」などと名前を変えて諸国行脚をしている様子が散見されます。そのほか赤穂事件の実録である写本『内侍所』(山本所蔵)の識語や回国堂三千風作『三千風形見草』(享保 11(1726)年刊)より、各地で義士伝を語り、写本を作成していた様子をうかがい知ることができました。これらのことにより都の錦が舌耕や写本といったメディアを巧みに活用していたのではないかと推測しました。

また幕府が出した法令と、越後騒動や金森騒動、寛政の尊号事件を語って重罪に問われた講釈師たちの事例に照らして、都の錦が流罪になったのは、従来言われていた無宿取締によるものではなく、赤穂事件を語ったことによることを指摘しました。

都の錦は、処女作の『元禄曾我物語』では講談のような語り口で叙述します。また罪に問われてもなお、舌耕や写本の作成を続けました。生涯、講釈師として在り続けた都の錦の姿が浮き彫りになりました。

鶴崎報告では、ある地域が古典文学でどのように描かれているかを考察することを通じて、その地域の特色を見出していく地域文学論の有用性について言及し、その事例として神崎川の河港を取り上げました。

神崎川沿いの河港である江口、神崎、大物はそれぞれ、古典文学作品の中に頻りに登場します。それらを丹念に拾った上で、神崎川の特異性は古典との結びつきが深いことにあると指摘しました。

今回の例会では、両報告とも一人の人物あるいは一地域を追跡するのに、文学作品を丹念に調査する手法をとっていました。二次資料とされる文学作品を資料として、いかに使うのかについて考える機会となりました。

(学芸遺産研究プロジェクト R.A. 松本 望)

2006 年度第 2 回祭礼遺産研究例会

内田 吉哉 (祭礼遺産研究プロジェクト R.A.)

「大阪府下の神社合祀に関する新聞記事調査」

和住 香織 (関西大学大学院博士課程前期課程)

「明治後期の大阪の神社」

2007 年 1 月 12 日 (金)

明治末期の神社合祀の結果、大阪府内では明治初期に 1900 社を超えていた神社が、665 社にまで減少したといえます(田村利久「明治期神社合併資料」、『大阪春秋』第 29 号、1981 年)。この政策では、神社に「国家の宗祀」たる体面を保持させるため、維持が難しい神社はできるだけ整理し、その統廃合によって神饌幣帛料の供進が得られるようにすることが課題とされていました。このような状況における神社の実態を把握するため、祭礼遺産研究プロジェクトでは、2005 年度から新聞記事調査を実施しています。今回の例会は、これまでの調査を踏まえた報告会となりました。

まず調査の概要について内田吉哉が報告しました。内田は「文化遺産学」の視座からも、近代の大阪において「何が失われ」、「何が失われなかったのか」ということに留意する必要があると述べました。また、新聞記事は当時の市民意識を捉えることができる有効な資料であり、現在では行われていない神社行事の記述がみられる点からも、新聞記事を調査することが必要であると、その意義を示しました。

続く和住報告では、明治後期の新聞記事に、神社合併・移転・正遷宮など、神社に関する多様な内容がみられること。さらに、新聞紙面では神社の尊厳が保たれなくなっていることが問題として主張されていると、具体的な事例を取りあげて説明し、合祀の背景を明示しました。また、大阪府庁が所蔵している宗教行政資料を紹介し、資料には明治から昭和初期にいたる神社・寺院の明細帳、土地台帳が含まれ、新聞記事とともに、合祀の実態や神社の変貌が把握できるものであると指摘しました。

新聞記事調査は 2007 年度も継続されています。

(祭礼遺産研究プロジェクト R.A. 内海 寧子)



祭礼遺産研究例会の様子

2006年度第2回生活文化遺産研究例会

尼子奈美枝（(財)元興寺文化財研究所研究員）

「出土金属製品の保存処理」

川本耕三（(財)元興寺文化財研究所研究員）

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心
での金属器保存処理～保存科学について」

木庭元晴（関西大学文学部教授）

「無層理未固結堆積物の堆積環境復元
ーレーザー回折法による粒度分析法とX線像からー」

2007年1月13日（土）

当センターには保存処理分析作業室が設置されています。当室には、脱塩装置などの金属製品の保存処理を行なうための装置やX線透過撮影装置、粒度分析装置、質量同位体測定装置などがあります。そこで今回の例会ではこれらの装置を活用し、調査・研究を進めていくための事始として、保存処理および分析の両面からの報告がなされました。

まず、尼子奈美枝氏から元興寺文化財研究所（以下元文研）で実際に行なわれている金属器保存処理の方法やその工程ひとつひとつについての詳細な説明を通して、保存処理とはどういうものか、何のためにそのような作業を行なうかなどについて述べられました。さびてぼろぼろになった金属製品を保存処理することによって、それに秘められた情報を引き出し、後世に伝えていくことが保存処理に課せられた使命であるということです。そして、今の方法や材料が完全なものではなく、よりよい方法を模索し続けることが必要不可欠だということです。

続いて、尼子氏の報告を受け、川本耕三氏が当センターで行なう保存処理について報告されました。当センターの保存処理方法は元文研の手法を踏襲しますが、ひとつ異なる工程があります。それは脱塩処理工程です。そこで、元文研で行なっているアルカリ水溶液含浸法と当センターで行なう高温高压法について、両者の長所・短所についての説明がなされました。さらに、脱塩条件の検討のために行った2回の脱塩実験の報告がなされました。結果、インヒビター（腐食制御剤）として使用するにはホウ砂がより効果的で、安全性の面でも優れているということでした。さらに、文化財の科学的分析、特に保存処理を行なう上で必要な資料の材質などの分析・調査の紹介や、保存処理終了後の資料を後世に伝えていくための保存環境についての報告も行なわれました。

木庭元晴氏は、X線像や粒度分析の考古学的利用の手法として、X線像を使用した堆積物の堆積構造の把握や、粒度分析による人的擾乱の把握について述べられました。肉眼では無層理に見える堆積物のX線写真による堆積構造把握は、これまで明確な成功が報告されてい

れたX線像から無層理堆積物の堆積構造を捉えられ、X線像の利用による、堆積物の堆積時の構造把握について報告されました。粒度分析を利用した人的擾乱の把握についても報告されました。今後は堆積構造と構成粒度分布の関係性や、試料の粒径域による水成・風成の由来を求めたいということです。

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 千葉 太朗
R.A. 影山 陽子）

なにわ・大阪文化遺産学研究中心 出版物の紹介

なにわ・大阪文化遺産学研究中心では、News letter『難波渦』のほかに、NOCHS レクチャーシリーズの講演をまとめた『Occasional paper』や各プロジェクトの研究成果をまとめた『なにわ・大阪文化遺産学叢書』を発行しております。今回、これまでに出版された叢書についてご紹介します。

なにわ・大阪文化遺産学叢書 1

『関西大学図書館所蔵

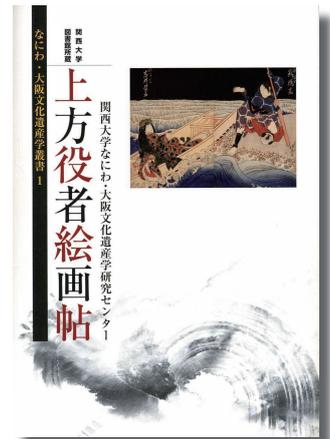
上方役者絵画帖』

編集：北川 博子

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心研究員）

発行：2006年3月31日

仕様：A4版、縦書き 55P
+ 横書き 9P



なにわ・大阪文化遺産学叢書 2

『大坂代官 竹垣直道日記(一)』

編集：藪田 貫

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心研究員）

校訂：松本 望・内海 寧子

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心 R.A.）

発行：2007年3月31日

仕様：A5版、縦書き、
図版 1P + 11P + 263P



なにわ・大阪文化遺産学センター ホームページ新装開店



なにわ・大阪文化遺産学叢書 3

『神社を中心とする村落生活調査報告（一）』

大阪府—大阪市・三島郡・豊能郡—

編集：黒田 一充

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学
研究センター研究員）

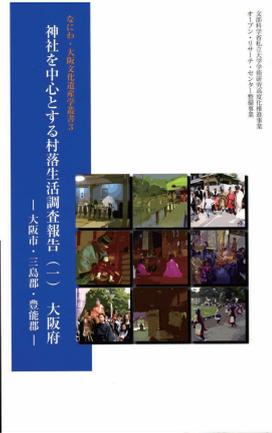
校訂：内海 寧子

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学
研究センター RA）

発行：2007年3月31日

仕様：B5版、縦書き、

図版 1P + 13P + 366P



なにわ・大阪文化遺産学叢書 4

『道明寺天満宮宝物選』

執筆：南坊城 充興

（道明寺天満宮宮司）

高橋 隆博

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学
研究センター長）

南坊城 光興

（道明寺天満宮禰宜）

森 隆男・米田 文孝

原田 正俊・長谷 洋一

吉田 晶子

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学
研究センター研究員）

千田 康治

（高槻市立しろあと歴史館学芸員）

宮元 正博・千葉 太郎

（関西大学なにわ・大阪文化遺産学
研究センター RA）

発行：2007年3月31日

仕様：A4版、縦書き、88P



2007年度より、センターのスタッフとして新たに3名のP.D.とR.A.が採用されました。
櫻木 潤(P.D.)…前年度まで歴史資料遺産研究プロジェクトRA
影山陽子(生活文化遺産研究プロジェクトR.A.)
松永友和(歴史資料遺産研究プロジェクトR.A.)

編集後記

『難波瀉』No.6をお届けいたします。前号の発行から5ヶ月の期間があき、そのためトップの韓国文化遺産視察の記事は、やや季節外れとなりました。この視察旅行で得た経験をもとに、今年7月14日(土)に日本・韓国・中国の文化遺産をテーマとした国際シンポジウムを開催する予定になっております。私たちスタッフとしては、韓国でお世話になった金鎬詳氏や、ガイド兼通訳の金美貞氏に再会できるのが大変楽しみです。また中国の研究者の方との新たな出会いにも大きく期待しています。

(R.A. 内田 吉哉)

当センターのホームページがリニューアルされました。研究センター設立のコンセプトや各研究プロジェクトの紹介のほか、研究行事・資料紹介・成果物についてもコンテンツを設けています。

研究行事コーナーでは、最新の行事をご紹介するとともに、過去の行事についても見る事ができます。資料紹介コーナーでは、当センターが所蔵する資料のうち、購入資料・寄贈資料について解説とともに一部画像も掲載しています。成果物コーナーでは、各出版物の表紙画像と目次内容、NOCHS MAILについては全文を閲覧できるようになっています。

トップページのタイトル画像は、左には第2回ワークショップ「お茶と茶釜」での茶席、中央には関西大学創立120周年記念行事・特別公演「篝の舞楽」で演じられた還城楽の一場面、右には当センター棟の遠景を配してあります。各コーナーに移動するとタイトル画像も変わり、上記の3景に加えて画面左半分を関西大学博物館所蔵・本山コレクションの拓本が占めることとなります。今後、内容の充実をはかっていく予定ですので、どうぞご訪問ください。

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
オープン・リサーチ・センター整備事業(平成17年度～平成21年度)
なにわ・大阪文化遺産の総合人文学的研究

関西大学なにわ・大阪文化遺産学センター

News Letter 「なにわがた
『難波瀉No.6』」

発行日 2007年6月29日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL 06(6368)0095 Fax06(6368)0092

http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/

E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp

印刷所・編集協力 (株)廣済堂